東方學報 京都第 94 册（2019）：354-332 頁

中國文學批評史と近代の文學論

―― 20 世紀前半の通史を材料に ――

永　田　知　之

は　じ　め　に

近代を迎えた後，様々な領域で前近代を總括する通史が編まれることは，多くの文化圈に共通する事象と思われる。20 世紀前半の中國も，その例外ではない。筆者も先に別稿[1)]で觸れたが，古典文學における批評・思想についても，複數の通史が著された。もっとも，そういった通史が本國でのみ編まれるとは限らない。現に中國の詩論や文學思想を概觀する著述を夙に著したのが日本人の學者だった事實は，別稿に記したとおりである。

これも別稿で言及したが，かかる日本人の著述が翻譯などを通して，中國人による「中國文學批評史」などと題する著作に影響を及ぼすことになる。その影響は，文學をめぐる理論・批評を通史で論述する形態自體に最も顯著である。ただし，「中國文學批評史」に示唆を與えた論著は，それのみに止まらない。殊に注目されるのは，「文學」や「批評」とは何かという定義について，複數の「中國文學批評史」が外國の文學論を援用する點である。

こういった「中國文學批評史」が文學に關わる國外の言說を如何なる經路によって，どう參照したか，小論ではその點について初步的な考察を試みたい。もとより外國の，中國から見て新しい理論を導入した領域は，古典文學の研究に絞っても，批評に限定されるわけではない。それにも關わらず，「中國文學批評史」に對象を限定するのは，何より筆者がそこに關心を抱くからである。ただ中國の「文學批評史」は「文學史」に比べて（外部の新理論により接することが可能なほどに）登場が遲れ，また（「文學」の何たるかが曖

1）　永田知之「中國古典文學の「思想」と「批評」　20 世紀前半に編まれた通史をめぐって」，久保昭博・河田學・岩松正洋編『虛實のあわいに ―― 大浦康介退職記念論文集』（大浦康介退職記念論文集編集委員會，2019 年）。小論では，これを別稿と呼ぶ。

味な「文學史」も少なくない中で)「批評」という主知的な事柄を扱うためもあって，一般には概念の規定に相應な力を注ぐ。その過程で西洋など（表題の「近代」は西洋近代を主としつつ，日本近代をも含むと定義しておきたい）の理論に依據する側面が，顯著に見られる。

このような文學論の研究史を主題とする論著は，書籍の形を取る例に限っても，既に複數が刊行されてきた[2)]。それらの研究より，小論も多くの恩惠を受けるであろう。ただ，これらは中國國外の新理論による影響を論じることに手薄か，また論じても歐米からの受容にだけ着目する，さらには「中國文學批評史」の著者らが用いた情報源を等閑に附す傾向を持つ。小論では，こういった研究狀況に一石を投じたいと考える。

第 1 節以下では，1940 年代前半までに刊行が始まった「中國文學批評史」の中で，中國國外の文學論を用いたと明言する事例 —— それは「文學」,「批評」の定義に集中する —— を見ていく。もちろん，これらの通史以外にも當該の領域には重要な論著が著されてきたし，著者が言明せずに外國人による理論を利用した箇所も存在するだろう。ただ，今は筆者の憶測を交えずに，新理論が利用された明確な跡のみを檢證したいと考える。中華民國期の知識人が自國の古典を總括する際に外國の理論をどう反映させたか，そのことを知る上でこのような作業も無益ではなかろうし，また考察を深化させる折の足掛かりにもなろうと思われる。

第 1 節　陳鐘凡『中國文學批評史』と本閒久雄『新文學概論』

中國の古典文學をめぐる批評を主題とする通史としては，陳鐘凡（1888-1982）の『中國文學批評史』（中華書局，文學叢書第一種，1927 年[3)]）にまず指を屈することになる。同書（以下，陳著）が公刊された時點で，著者は金陵大學國文系教授の任に在った[4)]。陳氏は舊來の教育が近代の學校制度へと生まれ變わる時期に學問を身に着け（1917 年に北京大學文

2） 張海明『回顧與反思：古代文論研究七十年』（北京師範大學出版社，1997 年），蔣述卓・劉紹瑾・程國賦・魏中林等『二十世紀中國古代文論學術研究史』（北京大學出版社，2005 年），韓經太『中國文學批評史研究』（福建人民出版社，2006 年），黃霖主編，黃念然著『20 世紀中國古代文學研究史・文論卷』（東方出版中心，2006 年），李春青等『20 世紀中國古代文論研究史』（山東教育出版社，2008 年），彭玉平『詩文評的體性』（北京大學出版社，2012 年）などがある。

3） 陳著，卽ち『中國文學批評史』は上海の中華書局による初版（1927 年 2 月）が刷次を重ねた後，長らく刊行されなかったが，今日では新裝版（江蘇文藝出版社，2008 年）が存在する。

4） 陳鐘凡（名は鍾凡，中凡とも作る）の生涯に關しては，姚柯夫編著『陳中凡年譜』（書目文獻出版社，1989 年）が參考になる。

科哲學門を卒業した），中華人民共和國の建國後は長く南京大學中文系の教授を務めた。古典學者として知られ，特に文學を扱う業績を多く遺している[5]。さて陳著だが，「文學之義界」（この「義界」は定義を意味する），「文學批平」（「平」は「評」に通じる，以下同じ），「中國文學批平史總述」と各々題する最初の三章を除くと，第四章から第十二章まではそれぞれ周秦，兩漢，魏晉，宋齊梁陳，北朝，隋唐，兩宋，元明，清代を「批平史」に冠する章題を持つ。總論と王朝で區分された各章から成る通史という點は，明らかである。

「中國文學批評史」，あるいはこれに類した表題の，中國人による著作は，陳著をもって嚆矢とする。從って先驅性は大いに認められるべきだが，同書に對する評價は，今日に至るまでそう高くない。資料の平板な提示に終始する一方で，陳著は批評の歴史を見通す視座を缺くと思しい。後に續く同じ分野の著作でも用いられる基礎的な資料の收集は陳氏の功績であって，それは賞贊に値するが，高からぬ評價の原因は確かに陳著の中に見られる[6]。

さて陳著において，歐米の文學理論への言及は，以下の二箇所に確認される。まず第一章の「（一）文之本義及其歧義」で「文」の字義を，「（二）歴代文學之義界」で前近代中國における「文」（文學）の定義を論じた後，「（三）近世文學之義界」で陳鐘凡はこう述べる（傍線は原文のとおり，以下同じ）。

> 法國批評家佛尼 Vinet 謂：「凡人彙合其一身而表見于他人之文章，皆謂之文學。」英國批評家埃諾特 Ma（ママ）t hew Arnold 曰：「文學乃一廣博之名，其意可指一切繕寫或印刷之書籍。」至美國亨德 The（ママ）v dore W. Hunt 著文學原理及問題一書，乃檢討諸說，而下一精確之定義曰：「文學者，藉想像，感情，及趣味以表現思想之文字也。[7]」

ヴィネ Alexandre Rodolphe Vinet（1797-1847）はスイス（著述にはフランス語を用いた）

5） 單行する著作を除いて，多くの論文が陳中凡著，姚柯夫編『陳中凡論文集』（上海古籍出版社，1993 年）に集成される。また，同書卷末の「陳中凡年譜」も有用である。

6） 朱自清が郭著（第 2 節冒頭，注 26）について著した書評「中國文學批評史上卷」（『清華學報』第 9 卷第 4 期，1934 年）1011 頁に「郭君的書出版的前七年，已經有人寫過一本中國文學批平史。那似乎隨手掇拾而成，竝非精心結撰。取材只是人所熟知的一些東西，說解也只是順文敷衍，毫無新意，所以不爲所重」とある。名指しこそしないが，「郭君的書出版的前七年」（郭紹虞『中國文學批評史』が出版される七年前）に刊行されたという以上，ここで批判される「中國文學批平史」が陳著だということは明らかである。朱喬森編『朱自清全集　第 8 卷　學術論著編』（江蘇教育出版社，1993 年）「文學論著」に，同じ書評が「評郭紹虞《中國文學批評史》上卷」と題して再錄される（當該の箇所は 196 頁に見える）。

7） 陳著 5（4）頁。陳著からの引用は，初版の頁數に加えて，やはり注 3 に擧げた新裝版のそれを（　）內に示す。以下，同じ。

の神學者・心理學者だが，文學批評でも實績を上げた。アーノルド Matthew Arnold（1822-1888）はイングランドの詩人にして批評家，ハント Theodore Whitefield Hunt（1844-1930）はアメリカ合衆國の英文學者である。ここで陳著に引かれる言說は，それに當たるだろう一節がヴィネ[8]，アーノルド[9]及びハント（注 18）の著作に見出せる。引用に續いて，陳鍾凡は同じ項で「姑妄定文學之義界曰：『文學者，抒寫人類之想像，感情，思想，整之以辭藻，聲律，使讀者感其興趣洋溢之作品也。』[10]」と結論づける。從って彼の言葉に民國をも含む中國の傳統的な言說と特にハントが唱えた西洋の理論からの影響を見出す意見が提起されたのは，當然ともいえよう[11]。ただし，ここから彼が西洋の文獻より直接の影響を受けたと卽斷することは差し控えなければなるまい。

今，文學に對する近世諸家の解釋の一端を示せば，……佛蘭西の批評家ヴィネー（Vinet 一七九七-一八四七）は「文學とは，人間が彼れ自身を綜合的に，他の人間に表現するやうなすべての書き物を包括してゐる（Literature embraces all those writings in which man reveals himself synthetically to man）」と云ひ，又，近代における英國第一流の批評家マシュウ・アヽノルド（Matthew Arnold 一八二二-一八八八）は「文學は一種の偉大なる言葉である，それは文字で書かれ又は書籍に印刷されたすべてのものを意味してもよい（Literature is a great word. It may mean everything written with letters or printed in a book.）」と云ふ極めて漠然としたことを云つてゐる。……

アメリカのプリンストン大學の英文學教授であるハント氏（Theodore W. Hunt. 一八四四—）はその著『文學，原理及問題』（Literature, its Principles and Problems）の中で以上の諸說を檢攻して，更に氏一個の定義として述べてゐるものは，ポスネット[12]

8） Vinet, Alexander Rodolphe. *Outlines of Philosophy and Literature*. London : Strahan, 1867. 457.

9） Arnold, Matthew. 'Literature and Science.' *Discourses in America*. London : Macmillan and Co., Limited, 1902. 90. 因みに島村瀧太郎講述『文學概論』（早稻田大學出版部，1909 年）「第三　西洋に於ける文學の定義」5 頁でもアーノルドの說が「凡て書册より來たる知識は文學也」と譯して引用される。島村瀧太郎（抱月）は坪內雄藏（逍遙）と共に本間久雄の師で，その『文學概論』は『抱月全集』第 4 卷（天佑社，1919 年）に再錄される（當該の箇所は 406 頁に見える）。本間が自著を『新文學概論』と題した理由は，師の『文學概論』への意識にあったのかもしれない。

10） 注 3 所揭陳著 5-6（4）頁。

11） 陳著（注 3）とそこに含まれる西洋の文學論からの影響は，注 2 所揭『二十世紀中國古代文論學術研究史』32-38 頁（劉紹瑾氏執筆），『詩文評的體性』62-74 頁に分析が見える。また王偉青「陳鍾凡與《中國文學批評史》的肇始」（山西大學 2017 屆碩士學位論文，2017 年）も參考になる。

12） 引用では省略した箇所に，文學の定義に關わって，次の書籍からの引證が見える。Posnett,↗

氏のよりも更に一段と文學の概念としては精確である。氏は曰く，

> 文學とは，想像，感情及び趣味を通じての，思想の書かれたる表現であつて，而もそは一般の人々に容易に解し易く又興味を牽くやうな非專門的形式においてあらはされたものである。
>
> Literature is the Written Expression of Tho(ママ)a ght, through the Imagination, Feelings and Taste, in such an untechnical form as to make it intell(ママ)e gible and interesting to the general mind.（本間久雄『新文學概論』前編「第一章　文學の定義」[13]，「……」は筆者による省略箇所を示す。斷らない限り以下同じ）

本間久雄（1886-1981）は米澤市に生まれ，長じて早稲田大學英文學科に學ぶ。後に早稲田大學文學部教授を務め，英文學・國文學に關わる著述を多く遺す。文學理論を含めて，大正時代の日本にヨーロッパ文化の様々な側面を移入させたことで知られる[14]。ここに引いた『新文學概論』は前編「文學通論」（全 10 章），後編「文學批評論」（全 5 章）から成り，陳著に先立つこと十年の大正六年（1917）十一月に刊行された。

ヴィネ，アーノルド，ハントの順に文學の定義に關わる言說が擧げられる點は，陳著と『新文學概論』で異なるところが無い。また前二者の出典は見えないが，ハントの說に關しては出所となる書名が示される。アーノルドの名“Matthew”を“Mathew”と誤ることも，兩者に共通する。『新文學概論』の中國語譯は早くに公刊され[15]，廣範な流布

↘ Hutcheson Macaulay. *Comparative literature*. New York : D. Appleton, 1886. ポスネット（1855-1927）はアイルランド出身の法律家かつ學者で，ニュージーランドを活動の地とした。ポスネットの著書は『比較文學』として，注 9 に擧げた島村瀧太郎『文學概論』「第三西洋に於ける文學の定義」4-5 頁（『抱月全集』第 4 巻 406 頁）にも引用される。

13）『新文學概論』（新潮社，1917 年）7-11 頁。引用されるアーノルドの文章で“great”とある箇所は，その著作（注 9）に據れば，“large”が正しい。またヴィネの言葉に見える“reveals himself syntheticlly”は注 8 所掲書に據ると“synthetically reveals himself”が正しいが，注 18 に擧げたハントの著書でも同じように誤る。

14）本間久雄の生涯と特に大正時代までの活動は，平田耀子『本間久雄 —— 大正時代のヨーロッパ文化移入』（早稲田大學出版部，2012 年）に詳しい。

15）『新文學概論』という同じ表題で，汪馥泉による譯書（前・後編，上海書店，1925 年 5 月），章錫琛による現代中國語の譯書（前・後編，商務印書館文學研究會叢書，1925 年 8 月）が出版された。ただ，それ以前に瑟廬（章錫琛の筆名）の文言による翻譯が，前編のみ雜誌『新中國』に連載されており，同誌第二巻第三號（1920 年）89-90 頁に見える次の譯文を本文に擧げた陳著の一節と比べれば，陳鍾凡がこれに據って『新文學概論』を利用した點は明らかであろう。「法國批評家佛尼。（Vinet）謂「凡人彙(ママ)合其一(ママ)身而表現於他人之文字。皆謂之文學。」……又英國近代第一專批評家埃諾特（Ma(ママ)t hew a rnold 一八二二-一八八八）曰。「文學乃一廣博之名詞。其意可指一切書寫或印刷之書籍。」……則其義尤覺太泛。……美國普靈斯頓大學英文學教授亨德（Theodore W. Hunt.）氏。其所著『文學與其原理及問↗

が知られる[16]。これらの事實を勘案すると，卷末の「參考書目」などには見えないが[17]，陳著は『新文學概論』を通じてヴィネらの言說を取り込んだと考えられる。

公平を期すならば，本閒もヴィネやアーノルドの論著を確認していたかは定かではなく，ハントの著作からそれらを轉引した可能性は指摘されねばなるまい[18]。ただし『新文學概論』の前編「文學通論」について，ハントの著述などに依ったことは，本閒自身が明言する[19]。

陳鐘凡が日本人による『新文學概論』（の中國語譯）を通じて歐米における文學の定義を引いた可能性が高いことを知ると，他の箇所にも同樣の事象―洋書に依據せず西洋の文學論を援引する―が見られるのではないかという疑いが生じる。陳著に原題の擧がる歐米の文獻は，3 點に止まる。みな第二章の末尾に書名が見え，米國のウィンチェスター

↘ 題』（Literature, its Principles and Problems）書中。檢討以上諸說。更述一精確之定義曰。
文學者。藉想像，感情，及趣味以表現思想之文字。用非專門的形式。使普通人之心中。易於了解且有興味者也」。

16） 工藤貴正「ある中學敎師の『文學概論』（上）―― 民國期における西洋の近代文藝概說書の波及と受容 ――」（『大阪敎育大學紀要』第 I 部門（人文科學）第 51 卷第 1 號，2002 年），同「ある中學敎師の『文學概論』（下）―― 本閒久雄・厨川白村・小泉八雲の文藝論の受容 ――」（同第 51 卷第 2 號，2003 年）參照。これらは同『中國語圈における厨川白村現象 ―― 隆盛・衰退・回歸と繼續 ――』（思文閣出版，2010 年）167–217 頁に再錄され，また同書 328–335 頁でも民國時期の文藝理論書複數において『新文學概論』が參照された狀況が整理されている。

17） 陳著（注 3）の「參考書目」178 頁に鹽谷溫述『支那文學概論講話』（大日本雄辯會，1919 年），兒島獻吉郎（陳著は「郎」を誤脫）『支那文學考』（目黑書店，1920・1922 年），鈴木虎雄『支那詩論史』（弘文堂書房，1925 年）の著者名・書名を揭げる（日本の文獻はこの 3 點のみ，新裝版の同じ欄に日本語の文獻は揭出されない）。なお陳著より刊行は遲れるが，孫俍工『中國古代文藝論史』（北新書局，1928・1929 年）は『支那詩論史』の中國語譯で，注 1 所揭の別稿 190–193 頁でも述べたが，この譯書を通して鈴木の研究は中國での古典文學理論・批評の研究にも相應な影響を與えた。李羣『近代中國文學史觀的發生與日本影響』（湖南大學出版社，2016 年）「第三章　近代中國“文學史”的寫作與日本影響・第四節 《中國文學批評史》的誕生與日本影響」では，注 2 に擧げた諸研究に比べて，このような影響がよく分析されている。

18） Hunt, Theodore W. *Literature : Its Principles and Problems*. New York and London : Funk & Wagnalls Company, 1906 : 22–24. 本文に擧げた『新文學概論』の一段は，これに依據する。このハントの著作から文學の定義を陳鐘凡が陳著に引用した可能性も，皆無ではない。ただしハントはヴィネやアーノルド以外の人物による複數の言說を引いており，陳著の記述はそれらを本閒が縮約した敍述の方により近く，やはり陳鐘凡は『新文學概論』に據ったと考えるべきだろう（因みにいうと，ハントはアーノルドの名を正しく“Matthew”と記す）。なお，ハントはヴィネを“the French critic”と稱する（*Ibid*. 22）。從ってヴィネの國籍をフランスと記す本閒久雄，陳鐘凡の誤りはハントに由來すると分かる。なお，ハントの著作には Theodore W. Hunt（韓德）著，傅東華譯『文學概論』（商務印書館，漢譯世界名著，1935 年）という中國語譯が存在する。

19） 前注で觸れたハントの著書などに依據した旨が，『新文學概論』（注 13）の「序」2 頁に明記される。

Caleb Thomas Winchester（1847-1920）[20]，英國のモールトン Richard Green Moulton（1849-1924）[21]，ハドスン William Henry Hudson（1862-1918）[22] をそれぞれ著者とする。彼らは，共に英文學の專門家である（モールトンは米國でも活動した）。

陳著の第二章「文學批評」（目次では「文學批平」）は，「（一）批評之意義」，「（二）批評之派別」に分かれる。前者で陳鐘凡は「考遠西學者言「批評」之涵義有五：指正，一也。讚美，二也。判斷，三也。比較及分類，四也。鑑賞，五也」と述べる。續く記述も參照すると，批評でまず先立つ行爲は（作品の）比較・分類，判斷（價値の判定を指すようだ）で，そこから鑑賞に及び，讚美や指正（缺陷などの指摘）は餘事だと，陳氏は西洋の文學批評を把握していたと分かる[23]。

その一方，後者では「～的批評」という呼稱で，批評が 12 種に分類される。「～」に入る語は歸納，推理，判斷，考訂，歷史，比較，解釋，道德，審美，印象，欣賞，科學である（このうち歸納・判斷・歷史・比較・道德・審美・印象・科學的批評が次節で見る羅根澤の分類と呼稱まで一致する）。詳細は省くが，批評の定義・區分は西洋近代の文學理論に度々見られ，ウィンチェスター，モールトン，ハドスンの著作もこれを扱う篇・章を設ける[24]。文學批評の意義を述べる點，種別が完全に一致するわけではないが，それらを分類する點で陳著がウィンチェスターらの著作を蹈まえることは疑い得ない。ただし，そういった記述は『新文學概論』に見られるし，同書はウィンチェスターやモールトンの說を度々引用する[25]。

20） 陳鐘凡が擧げる著作は次のとおり。Winchester, C. T. *Some Principles of Literary Criticism*. London : The Macmillan Company, 1899. 注 3 所揭陳著の 8（147）頁には著者名と書名のみ見えるが，“Some” を缺く。なお同書には漢譯がある（注 72）。

21） 注 3 所揭陳著の 9（147）頁に擧げられる著作の正確な書名等は次のとおり。Moulton, Richard Green. *The Modern Study of Literature : An Introduction to Literary Theory and Interpretation*. Chicago : The University of Chicago Press, 1915.

22） 注 3 所揭陳著 9（147）頁には著者名と書名のみ見えるが，出版者・刊行年を補ってハドスンの著作を示しておく。Hudson, William Henry. *An Introduction to the Study of Literature*. London : George G. Harrap & Co. Ltd., 1910. 邦譯にウィリアム・ヘンリ・ハドスン著，益田道三譯『文學概論』（聚芳閣，1925 年），中國語譯に韓德生著，宋桂煌譯『文學研究法』，『小說的研究』（共に光華書局，1930 年 5 月，10 月）がある（各々原書 1・2 編，4 編・附錄の翻譯）。なおこのハドスンは米國人の著名な作家・博物學者（1841-1922）とは，同名異人である。

23） 注 3 所揭陳著 6-7（5）頁。

24） 彼らの著作（注 20・21・22）のそれぞれ第一章，第四篇（第一〇章から第一七章），第六章が批評の定義・細分を主題とする。

25） 『新文學概論』（注 13）の後編が，文學批評を主題とする。なお同書の「序」2 頁にウィンチェスターの著作（注 20）を參照した旨が見える（ただし前編「文學通論」に限る）。これに對して，モールトン（注 21）の言說は，後編「文學批評論」に頻出する。注 17 所揭↗

批評に關する敍述でも，陳鐘凡はウィンチェスターらの著作に依據しつつ，本閒の『新文學概論』をも參照したのではないか。現時點では推論に止まるが，文學の定義における同書の利用を思えば，そのような想像は可能であろう。いずれにもせよ，中國での最初の「中國文學批評史」が國外の文學論を援用した様子の一端は，本節の記述からも明らかである。

第2節　羅根澤『中國文學批評史』に見られる西洋の文學論

中國人による「中國文學批評史」としては，郭紹虞（1893-1984）の同名の書が，陳著に續くこととなる。郭氏の『中國文學批評史』（以下，郭著）上卷は民國二三年（1934），下卷は遲れて同三六年（1947）に刊行される[26]。郭著は陳著とは比較にならないほど浩瀚で，內容も充實している。ただし，第一篇の「總論」などで文學や批評の意義を論じるが，中國の古典のみを提示しており，國外の文學論に觸れる箇所は特に無い[27]。

羅根澤（1900-1960）が前近代の文學批評を研究し始めた契機は，清華大學でのこの分野の講義を代わってくれるよう，郭紹虞に依頼されたことによる。獨學で古典の研究を習得し，燕京大學中文系で教授を務めていた郭氏は，同じ大學の國學研究所及び清華學校國學研究院で學ぶ羅氏を講師に推したのである[28]。やがて羅氏の研究は，著述に結實した。

羅根澤は『中國文學批評史』を民國二三年（1934）に刊行し，そこでは南朝までを扱う[29]。この後，彼は通史の構想を改めて，同三二年（1943）に『魏晉六朝文學批評史』，『隋唐文學批評史』を，時代を遡って翌年には『周秦兩漢文學批評史』を，さらに次の年

↘

『近代中國文學史觀的發生與日本影響』「第三章　近代中國“文學史”的寫作與日本影響・第五節　近代中國《文學概論》的誕生與日本影響」では，本閒久雄の著述を通じてウィンチェスターやハントの文學論が中國で知られていた狀況が分析される。

26）郭紹虞の『中國文學批評史』は大學叢書の一部として，商務印書館から上卷（1934年5月），下卷（1947年2月）が出版された（北宋までを上卷で扱う）。他に20世紀經典學術史本（百花文藝出版社，1999年），中華現代學術名著叢書本（商務印書館，2010年）がある。

27）ただし注6に擧げた書評（1012-1013頁）で，朱自清は郭著にしばしば見られる「純文學」，「雜文學」は日本の語彙だが，ド・クインシー Thomas De Quincey（1785-1859）の‘力的文學’（The literature of power），‘知的文學’（The literature of knowledge）という概念に基づくと指摘する。當該の箇所は，注6所掲『朱自清全集　第8卷』197頁にも見える。

28）次注で觸れる『中國文學批評史』「自序」1頁に據れば，民國二一年（1932）春に推薦されたという。

29）この人文書店版『中國文學批評史』は1934年8月（注26に掲げた郭著上卷の三箇月後）に出版された。

に『晩唐五代文學批評史』を公刊した[30]。これらが全て中央大學文學叢書に屬するのは，羅氏が中央大學の教授だったことによる（人民共和國建國後はその後身の南京大學に勤めた）。

羅根澤はこの後も當該分野の通史を書き續けるが[31]，今は 1930・1940 年代の研究に注目することにしたい。『中國文學批評史』では，西洋の文學論が一度だけ引用される。

> 古爾芒說：『文學史已經不復是一串作家的寫眞了；現在的問題是詩的問題或歷史的問題，不是詩人或歷史家的問題了。』[32]

この引用は本文ではなく，「自序」に見られる。フランスのグールモン Remy de Gourmont（1858–1915）は，詩人・作家及び批評家として名高い。「文學史はもはや一連の作家の肖像ではない。ただいまの課題は詩の問題あるいは歴史の問題であり，詩人また歴史家に關わる事柄ではない[33]」という彼の言葉を援用して，羅氏は批評史も批評家の肖像（傳記）ではない，批評の歴史だと述べる。その上で，自身の『中國文學批評史』には偉大な批評家（劉勰や鍾嶸）のために一章を設けて記述するが，十中八九は批評に傾き，批評家を重んじないと述べる[34]。

批評家の傳記ではなく，批評自體の論述に主眼を置くという方針は，明言こそされないが，『周秦兩漢文學批評史』から『晩唐五代文學批評史』に至る 4 篇（これらは「中國文學批評史」と總稱されるが，以下，羅著と呼ぶ）にも貫かれる。『中國文學批評史』（1934 年）に比べて，羅著，それも第一分册『周秦兩漢文學批評史』の「第一篇　周秦文學批評史・

30）前注に擧げた書籍と題目は等しいが規模の大きい『中國文學批評史』の 1 册として，『魏晉六朝文學批評史』が 1943 年 8 月，『隋唐文學批評史』が同年 11 月，扱う時代を遡らせて『周秦兩漢文學批評史』が 1944 年 1 月，最後に『晩唐五代文學批評史』が 1945 年 7 月に，みな重慶にあった商務印書館から出版された。これら 4 册の內容を 1 册にまとめた『中國文學批評史』（上海書店出版社，2003 年）がある。

31）羅根澤『中國文學批評史』3 册（古典文學出版社）として，後に刊行された。このうち前 2 册は前注に擧げた 4 分册版を基礎として 1957 年 12 月に，後 1 册（目次に「兩宋文學批評史」とある）は羅氏沒後の 1961 年 12 月に出版されている（宋代より後に關する原稿は傳わらない）。

32）『中國文學批評史』（注 29）「自序」1–2 頁。

33）グールモンの言葉は英文，卽ち Symons, Arthur. ‘The Independence of Poetry.’ *A Modern Book of Criticism*. Ed. Ludwig Lewisohn. New York : Boni and Liveright, 1919. 107. での引用に基づくが，羅根澤は同書の中國語譯である琉威松（Lewisohn）著，傅東華譯『近世文學批評』（商務印書館，1928 年）「詩之獨立」188 頁に依據したと思しい。張健「從分化的發展到綜合的體例：重讀羅根澤《中國文學批評史》」，『文學遺產』2013 年第 1 期（2013 年）127 頁參照。

34）『中國文學批評史』（注 29）「自序」2 頁。

第一章　緒言」，卽ち全體の冒頭では西洋の文學論をより多く提起する。

> 近來的談文學批評者，大半依據英人森次巴力（Saintsbury）的文學批評史（The History of Criticism）的說法，分爲：主觀的，客觀的，歸納的，演繹的，科學的，判斷的，歷史的，考證的，比較的，道德的，印象的，賞鑑的，審美的十三種。依我看是不夠的。按「文學批評」是英文 Literary Criticism 的譯語。Criticism 的原來意思是裁判，後來冠以 Literary 爲文學裁判，又由文學裁判引申到文學裁判的理論及文學的理論。文學裁判的理論就是批評原理，或者說是批評理論。所以狹義的文學批評就是文學裁判；廣義的文學批評，則文學裁判以外，還有批評理論及文學理論[35]。

文學批評の分類について，羅根澤は英國の文學史家・批評家セインツベリー George Edward Bateman Saintsbury（1845-1933）の說に依據したと稱する。特徵などから批評の樣態を分かつことは，前節で見た陳著に等しく，當時の文學論では珍しくもない[36]。その上で 13 種に區分しても不充分だと，羅氏は述べる。續けて關連する事柄を擧げて，中國の文學批評は文學裁判（いわゆる批評），批評理論，文學理論の三側面を含むという[37]。

> 唯其如此，所以西洋的文學裁判（狹義的文學批評）特別發達，批評理論也特別豐富。如批評莎氏比亞的書籍和論文，便眞是汗牛充棟，不計其數。同時所謂主觀的批評（Subjective Criticism），客觀的批評（Objective Criticism），鑒賞的批評（Appre vi tive Criticism），科學的批評（Si entific Criticism），演繹的批評（Deductive Criticism），歸納的批評（J nductive Criticism），性格的批評（Personal Criticism），形式的批評（Formal Criticism），以及其他各式各樣的批評理論，誠如雨後春筍，隨地而生。返觀中國，不

35）『周秦兩漢文學批評史』「第一篇　周秦文學批評史・第一章　緒言・二　文學批評界說」3-4（9）頁。以下，羅根澤の著した文章の引用は概ね同じ篇・章からなので，後の注では基本的に書名・篇名・章名を省き，注 30 で言及した『周秦兩漢文學批評史』の頁數を擧げた後，注 31 で觸れた古典文學出版社版等に基づく中華現代學術名著叢書本『中國文學批評史』（商務印書館，2015 年）のそれを（　）內に示す。

36）もっとも Saintsbury, George. *A History of Criticism and Literary Taste in Europe*. Edinburgh and London : William Blackwood and Sons, 1900-1904 には，批評を細分する記述は見られない。陳國球「文學批評作爲中國文學研究的方法 —— 兼談朱自淸的文學批評研究」，『政大中文學報』第 20 期（2013 年）11-12 頁參照。

37）文學裁判（狹義的文學批評）に「批評的前提」，「批評的進行」，批評理論（批評論）に「批評的立場」，「批評的方法」，「批評的錯誤」，「批評的批評」，文學理論（文學論）に「批評的建設」という各種の要素が含まれると羅根澤は整理する。注 30・35 所揭書「二　文學批評界說」4-8（9-12）頁參照。

惟對這些批評理論，不感覺興趣；對文學作家及作品的批評，也很冷淡。如最古的文學家是屈原，最大的詩人是杜甫，注解楚辭和杜詩的專書雖很多，批評楚辭和杜詩的專書則很少。不止對楚辭和杜詩不願以全力作批評，對其他的作品也不願以全力作批評。所以以「評」名書或文者已經不多，以「批評」名書或文者，更絕對沒有；有之如無聊選家 —— 特別是制藝選家的眉批總評，又毫無價值，沒有特別提敍的必要[38]。

西洋では作家・作品に評價を下す文學裁判（批評）が發展し，シェイクスピア William Shakespeare（1564-1616）を批評する論著など批評理論が盛んで，雨後の筍の如く主觀（的）批評といった批評法の種類も多く出ている（本節での先の引用に比べて，性格的・形式的の兩種が加わり，「賞鑒」を「鑒賞」に作る）。それに對して，中國では批評理論に關心が抱かれないのみならず，『楚辭』や杜詩の注釋は數あれども，兩者を批評する著作は少ない。これらだけではなく，他の文學作品も正面からの批評を想定していない。從って「評」を題目に含む論著は多くないし，「批評」と名付けられた書物・文章は存在しない。あっても暇をかこつ編者が批評を記した（特に八股文の）選集ほどで，そこに價値はない。

こう要約できる事柄を述べた後，羅根澤は文學裁判に無關心な中國人はむしろ文學理論には熱心であり，批評ではなく文學に關わる事柄を好んで論じ，樣々な課題を提起してきた，その現象は西洋にも無いわけではないが，西洋人はそれらにやや冷淡だと述べる[39]。續けて彼はアリストテレス Aristotélès（前 384-322）[40] やモンテスキュー Charles-Louis de Montesquieu（1689-1755）[41] が取り上げた風土が住民に及ぼす影響に言及する。溫暖な歐州では知識・眞實を重んじるため批評・批評理論が發展し，自然の嚴しい中國では實用・好尙が重んじられて文學理論が發達した —— 羅氏はかかる結論をそこから導

38） 注 30・35 所揭書「五　中國文學批評的特點」15-16（19-20）頁。

39） 注 30・35 所揭書「五　中國文學批評的特點」16（20）頁に「但對於文學裁判雖比較冷淡，對於文學理論則比較熱烈。中國人喜歡論列的不是批評問題，而是文學問題。如文學觀，創作論，言志說，載道說，緣情說，音律說，對偶說，神韻說，性靈說，以及什麼格律，什麼義法之類，五光十色，後先映耀於各時代的文學論壇。在西洋也不是沒有，但其比較冷淡，正同中國之對於批評的冷淡一樣」とある。

40） 羅根澤は『政治學』の名を擧げるが，その第 7 卷第 7 章に居住地によって住民の氣概・思考いずれに長じるかに差を生じる旨の記述が見える。なお，同書には亞里斯多德著，吳頌皋・吳旭初譯『政治論』（商務印書館，1931 年）という譯書（英譯からの中國語譯で萬有文庫・漢譯世界名著の一種）がある。

41） 『法の精神』第 3 部第 14 編第 2 章に寒冷な土地の住民は道德性に富み，溫暖な土地の住民は情感が豐かであるという意味の記述が見える。なお，同書は嚴復譯『法意』（商務印書館，1904 年）として中國語譯が出版されているが，モンテスキューの名は「孟德斯鳩」と音譯されている（羅根澤も同じ表記を用いる）。

き出す[42]。

批評・批評理論に中國人が重きを置かなかった，それとは對照的な西洋人の文學に向けた態度，さらに兩者の差が環境に根差すという羅根澤の見解，また前近代の中國と恐らく近代以降における西洋の文學觀を比較する彼の手法が正しいかは，いま論じるまい。ただ批評の專門書が少ない，あっても價値が乏しいというのは詩文，しかも宋代以前に對象を限定しての議論に思われる（注 31 でも觸れたとおり，彼の文學批評史研究は兩宋までに止まる）。しかしながら議論の當否はともかく，視野を中國にのみ限らず，できるだけ世界規模に廣げようという意志は，上掲の引用に窺われるのではないか。彼は，また次のような記述も遺す。

> 西洋的文學批評偏於文學裁判及批評理論，中國的文學批評偏於文學理論。所以他們以原訓「文學裁判」的 Literary Criticism 統括批評理論及文學理論，我們的文學批評，則依鄙見，應名爲「文學評論」。他們自羅馬的鼎盛時代，以至十八世紀以前，盛行着「判官式的批評」，有一班人專門以批評爲業，自己不創作，卻根據幾條文學公式，挑剔別人的作品。由是爲作家憎惡，結下不解的冤仇。十九世紀以後，才逐漸客氣，由判官的交椅，降爲作家與讀者的介紹人。後來法朗士諸人的印象派批評家起來，更老實說眞正的批評，祇是敍述他的魂靈的在傑作中的冒險。不過無論如何謙遜，批評與創作，究竟是對立的兩件事情。直到近代才逐漸融合。譬如英國近代詩人愛理阿德（T. S. Eli[ママ]a t）主張「創作必寓批評」，意大利美學家克羅齊（B. Croce）主張「批評必寓創作」。（自「羅馬的鼎盛時代」至此，依據朱光潛先生的「創作的批評」，見大公報文藝副刊第一四七期。[43]）

ここでも中國では文學理論ほどに批評・批評理論に力が注がれず，西洋の「文學裁判」に比べて，それは「文學評論」と呼ぶべきものだったと說かれる。美學者の朱光潛（1897–1986）が著した文章[44]に依據して，羅根澤は古代ローマの全盛期から西洋では批評

42） 注 30・35 所揭書「五　中國文學批評的特點」16–17（20–21）頁。

43） 注 30・35 所揭書「五　中國文學批評的特點」14（18）頁。なお，文中の「魂靈的在傑作中的冒險」という表現は，注 50 に擧げるアナトール・フランスが著した文章の題目に由來するのであろう。

44） 朱光潛の「「創造的批評」」は『大公報』「文藝副栞」第 147 期（1935 年 4 月 14 日）に揭載された。同じ文章は「“創造的批評”」と題して朱光潛全集編輯委員會『朱光潛全集』第 8 卷（安徽教育出版社，1993 年）に再錄されたが，羅根澤が依據した箇所は 374–376 頁に見える。

を專らにする者が文學の良否を論じており，彼らと作家は對立する關係にあったという。後に批評家の地位は下落し，「法朗士」ことアナトール・フランス Anatole France（1844-1924）ら印象批評の一派において眞摯な批評は評者の魂が傑作の中で遍歷した樣子を敍述するものとなるが，創作と批評が融合するのは近年に至ってのことだった。そのことの象徵として，米國（後年，英國に歸化）の詩人・批評家エリオット Thomas Stearns Eliot（1888-1965）の「創作は必ず批評を寓す」[45]，イタリアの思想家クローチェ Benedetto Croce（1866-1952）の「批評は必ず創作を寓す」[46] という言葉を引く。

羅根澤や彼が據り所とした朱光潛による西洋の創作と批評の關係に對する把握が正確かは，疑問なしとはしない。それにしても，羅氏が自國の古典文學と歐米の批評・批評理論との比較を試みていたことは明らかであろう。中國國外の批評に關わる言說として，ハーン（1850-1904）や先に名の見えたアナトール・フランスからも，彼は引用を示す。

> 這固然由於任何時代的社會關係都是複雜的，所以反映出來的文學也不能一致，但最大的原因由於批評家的個性不同。小泉八雲（Lafcadio Hearn）說：最下等的人間裏面，所有的人之習慣，思想，感情等等，非常相似，各人的差別不强。人間逐漸高等，各人的差異也逐漸顯著。至成爲智識階級的人，其個性特別發達，我們決不能看到兩位教授對一個問題的抱同樣見解。（見 Interpretation of Literature）因此，假使將文學批評分爲一般的批評與專家的批評兩種，則一般的批評差別較少，專家的批評差別更大[47]。超然就是客觀。絕對的客觀是沒有的。如法朗士所說，吾人永遠不肯捨棄自己，永遠鎖在自己的軀殼及環境，所以沒有眞正的客觀。（The Adventures of the soul，見 A modern book of criticisms[48]）

45） 次の箇所に見える記述に基づくと思われる。Eliot, Thomas Stearns. 'The Function of Criticism.'*Selected Essays 1917-1932*. London : Faber and Faber Limited, 1932. 31. 初め 1923 年に發表されたこの論文には，「批評の效用」（T. S. エリオット著，臼井善隆譯『エリオット評論選集』早稻田大學出版部，2001 年）など複數の邦譯がある。

46） Croce, Benedetto. Estetica come scienza dell' espresione e linguistica generale.（『表現の學及び一般言語學としての美學』）の一節を蹈まえると思しい。Filosofia dello Sprito（『精神の哲學』）の第 1 部を成す同書の譯書，ベネデット・クロオチエ原著，馬場睦夫譯『美學原論』（大村書店，1927 年）「第十六章　鑑識及び藝術の再生・第三節　鑑識と天才の同一性」參照。また『精神の哲學』の英譯・獨譯に基づく重譯に長谷川誠也・大槻憲二譯『美學』（春秋社，世界大思想全集 46，1930 年）がある。なお後年のことだが同じ英譯を底本とした克羅齊（Croce）著，朱光潛譯『美學原理』（正中書局，1947 年）が刊行された。

47） 注 30・35 所揭書「七　文學批評與文學批評家」20（24）頁。

48） 注 30・35 所揭書「十一　材料的搜求」27（30）頁。

小泉八雲にいわせれば，知識が增すほど人間相互の習慣・思想・感情は異なるので，一般人の中ではそう異ならない文學への批評が，專門家の間では差異がより明確になる[49]。また，後の方の引用に見られるアナトール・フランスの說に據ると，人間はどこまで行っても自己を離れることができず，肉體と環境に囚われるから，眞正の客觀などあり得ないとされる。絕對的な客觀が存在せぬ以上，評者の立場から超然たる批評は難しいというのだろう[50]。

世界的に知名度の高いアナトール・フランスは言うまでもなく，小泉の文學論は彼が最後に身を置いた日本の外，殊に中國でも廣く知られており[51]，羅根澤がそれらに言及したことも異とするに足りない。ただ（朱光潛の文章を通したクローチェ，英譯に基づくアナトール・フランスなど）間接的にもせよ，非英語圈の知識人にも學ぼうという姿勢は，羅著の中に見出し得る。それは前節で見た（本間久雄『新文學概論』を通じた受容を含め）英文の著作を幾分か參照したに止まる陳著に比べれば，顯著な特徵といえる。確かに，そこには陳著と羅著との間に存する十數年の時間差，著者の個性も關わっていよう。だが同じ羅根澤がより早い『中國文學批評史』（注 29）の本文では國外の文學論を提起しない點は，無視してはなるまい。本節で述べたとおり，『周秦兩漢文學批評史』（注 30）の「緒言」で西洋の批評理論に度々筆が及ぶことを考えると，『中國文學批評史』から羅著に至る期間（1934-1943）に起源を歐州に持つ文學論の援用に變化が生じた可能性が想像される。その樣相を知るため，羅著と同時期に形作られた今一つの「中國文學批評史」を見てみたい。

第 3 節　朱東潤『中國文學批評史大綱』と批評の定義

羅根澤が『中國文學批評史』を初めて刊行した際（1934 年）に參照した先行する同類の書籍といえば，陳著と郭著に止まる[52]。彼が改めて羅著を構成する各册を著す 1940 年代

49）Hearn, Lafcadio. *Interpretations of Literature*. 2 vols. Ed. and Sel. John Erskine. New York : Dodd, Mead and Company, 1915. Vol. 1. : 22. 東京帝國大學で英文學を講じた際の記錄である同書の日本語譯『ラフカディオ・ハーン著作集　第 6 卷　文學の解釋・Ⅰ』（恆文社，1980 年）「第三章　文體上におけるロマン主義と古典主義文學」（池田雅之氏譯）では 29 頁に當該の箇所が見える。なお，その中國語譯（沈澤民譯）が「文學論（八）」として『民國日報』副刊『覺悟』（1924 年 2 月 25 日）4 頁に見出せる。

50）注 33 に揭げた *A Modern Book of Criticism*. に收める France, Anatole. 'The Adventures of the Soul.' 1 頁に羅根澤の擧げた言葉に相當する記述が見られる。同文の中國語譚が「神遊」と題して注 33 所揭『近世文學批評』に收められる。

51）1930 年代を中心に小泉八雲の文學論が中國に傳播した狀況は，劉岸偉『小泉八雲と近代中國』（岩波書店，2004 年）「第三章　批評家ハーン」に詳しい。

52）『中國文學批評史』（注 29）「自序」（末尾に「羅根澤二十三年九月十五日」とある）3 頁に↗

までに文獻の數は增え[53]，方孝岳（1897-1973）の著書[54]などもその中に加わる。因みにいうと，日本人としては鈴木虎雄（1878-1963）による早期の著書以外に，青木正兒（1887-1964）の著作をも羅氏は參照している[55]。このように當該分野の研究が重ねられていた時期[56]，前近代中國の文學批評を研究し續けた人物は，他にもいた。

後に復旦大學中文系の教授を務める朱東潤（1896-1988）が，その人である[57]。中國の內外で學んだ彼は，民國二〇年（1931）より武漢大學で中國文學批評史を講じ，講義錄『中國文學批評史講義』初稿は翌年（1932）の夏に成る。續いて同二二年（1933）に第二稿，二六年（1937）には第三稿と修訂を重ねた講義錄が完成した。これは同年の秋に印刷に附されるが，折から日中戰爭が激化し，講義錄の刊行も頓挫する。戰火を避けて移轉する武漢大學と共に朱東潤も西へ向かうが，この間に第三稿の後半が散佚した。民國二八年

「編著的時候，得郭先生所編中國文學批評史的提示很多；至有所採摭，已分注於後。此外陳鍾凡先生所編中國文學批評史也給我的幇助不少」という。「二十三年」は民國二三年（1934）を指す。

53） 注 30・35 所揭書「自序」（末尾に「三十二年元月二十六日，根澤又記」とある）3（3）頁に「陳鍾凡郭紹虞兩先生中國文學批評史，方宗岳先生中國文學批評，日人鈴木虎雄中國古代文藝論史，皆曾參閱」とある。『中國古代文藝論史』については，注 17 を見られたい。なお「三十二年」は民國三二年（1943）を指す。

54） 方孝岳『中國文學批評』は，劉麟生主編『中國文學八論』（世界書局，中國文學叢書，1934 年）の一種として刊行された（『中國文學批評』と近い分野の著作として，『中國文學八論』の中には蔡正華『中國文藝思潮』も含まれる）。前近代中國の文學批評について手際よく記述する『中國文學批評』だが，西洋の文學論への言及は見られない。なお同書の影印・新裝版は複數存在するが，比較的近年に『中國文學批評　中國散文概論』（生活・讀書・新知三聯書店，2007 年）として同じ著者による『中國散文概論』との合本が出版された。

55） 鈴木については注 17・53 參照。また注 30・35 所揭書「第一篇　周秦文學批評史・第二章詩說・一　詩人的意見」41（42）頁に「作詩的意義」を分類・列擧した後，「（上四類，略本青木正兒之中國文學思想史綱，汪馥泉譯本頁一五，十六。）」とある。『中國文學思想史綱』（商務印書館，1936 年）の原著は『支那思想　文學思想』（岩波講座『東洋思潮〔東洋思潮の展開〕』岩波書店，1935・1936 年）だが，後にその「序論」に同じ著者の「支那文藝思潮」（『世界思潮』岩波書店，1928 年）の半ばを組み込む形で『支那文學思想史』（岩波書店，1943 年）內篇「通史」に再編される。いま『支那文學思想史』は『青木正兒全集』第 1 卷（春秋社，1969 年）に再錄される。

56） 「中國文學批評史」とは題さないが，『中國文藝思潮史略』（合作出版社，文藝叢書之二，1939 年）も同じ時期に刊行された。著者の朱維之（1905-1999）はキリスト敎徒の家庭に育ったこともあってか，西洋文學には早くから親しんでおり，著作の中にそれらや日本人による中國文學の研究への言及も見られる。ただし近代の文學論への關心はあまり見受けられず，批評を中心とするわけでもないので，小論では取り上げないでおく。なお『中國文藝思潮史略』の改訂版に，『中國文藝思潮史稿』（南開大學出版社，1988 年）がある。

57） 同時期に郭紹虞も同じ專攻で敎授の任に在った。郭・朱の兩人を中心に復旦大學が中國文學批評の研究據點となる過程は，葉輝・周興陸『復旦中國文學批評史研究』（廣西師範大學出版社，2006 年）に詳しい。

(1939)，武漢大學がひとまず落ち着いた四川省樂山で講義は再開されるが，失われた原稿は復元できず，朱氏は第三稿の前半と第二稿の後半に依據して講義錄を增訂する。增訂本に基づく『中國文學批評史大綱[58]』は民國三三年（1944），前節で「緒言」を見た羅根澤の『周秦兩漢文學批評史』と同じ年に出版された[59]。

19 世紀後半までに 2 册（652 頁），五代までに 4 册（502 頁）の分量を各々用いた郭著と羅著に對して，朱東潤の『中國文學批評史大綱』（以下，朱著）では 1 册（400 頁）で 20 世紀も閒近な時期に至る批評の歷史が概觀される。朱氏の講義錄は，主に批評家の名を題目とする章節を連ねた形を取る。それは修訂が施される中で增減を經てきたが，初稿を除けば，最終的な形態の朱著と章節の數（75 もしくは 76）はほぼ變わらない[60]。全體の紙幅が限られるだけに，各章節の記述は批評史の要點を押さえたごく簡潔な內容から成る。

郭著（注 26）や羅根澤『中國文學批評史』（注 29）の刊行（共に 1934 年）は，朱東潤の講義錄が朱著に向けて形を整えていく時期のことだった。現に朱氏はこれらの著作を參照しながら，自著に新味を出すべく務めていた。現代により近い明代・淸代の批評に多く —— 朱著だと全 76 章節のうち 35 章節 —— 筆を費やす點は，朱氏も意識してのことだった[61]。郭著の下卷は戰後（1947 年）に出版されたので，陳著（注 3）の如き簡略な例を除けば，前近代中國の文學批評を一貫して論じたという意味で，朱著は最も早い通史といえる。

古典詩文はもとより，郭紹虞は語法，羅根澤は諸子といったように文學批評史以外に造詣の深い分野を有した。この點は朱東潤も同樣で，後年には史傳の著述でも業績を遺した。加えて彼は民國二年（1913）秋から同五年（1916）まで英國に留學しており，郭・羅兩名より歐文の素養に富む。もっとも現行の朱著における西洋の文學論への言及は，一箇所に限られる。ただ前節では擧げなかった羅著の一節と，それを比較すると興味深

58）『中國文學批評史大綱』（開明書店，1944 年 1 月）の後，著者が修訂を施した古典文學出版社版（1957 年），上海古籍出版社版（1983 年）が刊行された。

59）前注所揭『中國文學批評史大綱』（開明書店版）「自序」1 頁（次注所揭の校補本でも同じ）に據る。朱東潤の講義錄が『中國文學批評史大綱』へと形作られ刊行に至る過程は，陳尙君「朱東潤先生研治中國文學批評史的歷程 —— 以先生自存講義爲中心」（『復旦學報（社會科學版）』2013 年第 6 期，2013 年）に詳しい。同論文は次注に擧げる『中國文學批評史大綱（校補本）』にも，「附錄四」として收められる。

60）朱東潤撰，陳尙君整理『中國文學批評史大綱（校補本）』（上海古籍出版社，2016 年）は近現代名家講義叢刊の一種だが，附錄に朱著の原型である『中國文學批評史講義』初稿などの稿本に關わる資料をも收め，各段階の講義錄と朱著との異同が示される。

61）朱著（注 58 所揭の開明書店版）「自序」2-5 頁（前注で擧げた校補本でも同じ）に記述が見られる。

い點がある。

> 文學裁判的職責既是批評過去文學，所以他的產生必在文學之後。英人高斯（Gosse）云：「從前的批評家每認定一種規律，衡量一切文學，由是創造的想像所完成的作品，如勃萊克，基慈，彌爾敦的詩，常常因爲不合乎他們的規律，爲他們所指摘。[62]」
> 然於此中有當知者，則對於某項文學之批評，其成熟之時，必在其對象已經完成以後。有違此例，必多乖舛。……英人高斯嘗言：「自今觀之，昔日之批評家建樹規律，執一繩萬，其病常在所不免，正規之批評中，常爲此規律太嚴之病所乘，而創造的想像所成之作品，常以不合當代之規律而見斥，如勃萊克，基慈，乃至彌爾敦之詩是矣。[63]」

批評に先立って作品が存在することは，贅言を要さない。ただし，そのために批評が日々生產される文學作品に生じた傾向の變化に遲れを取る事態が，往々にして起こる。それを指して英國の詩人・批評家ゴス Edmund Gosse（1849-1928）は，舊來の批評家は彼らが設けた基準に則って文學を評するが，それでは時代に先驅けた作品，例えばブレイク William Blake（1757-1827），キーツ John Keats（1795-1821），ミルトン John Milton（1608-1674）の詩などが排斥されることになると述べる。

批評の尺度が實際の創作に起こった變質に追い付けない現象に，羅根澤と朱東潤は注意を喚起している。ここで兩者が共に「高斯」ことゴスの，恐らく同じ言葉を引いた點は注目に値しよう。實は，朱著の原型ともいうべき講義錄では，他にも彼の說が引用される。

> 高斯（Edmund Gosse），英國有名之文學批評家也，其論批評曰：“批評一語，出自希臘語裁判之字，所以判定文學上或美術上的對象之性質及價値之藝術也。第一對於任何事物之性質，先須成立其判決幷發表之。埃諾德曰：‘批評者，一種無所爲而爲之努力，對於世間最佳之思想及知識，自覺覺人者也。’因此復有第二義，卽對於文學或美術之創作，分析其特點及性質，公之於世，而其自身復成爲一種獨立之文學也。至於指批評爲索瘢求疵之作，言之者雖多，其言絕無所據。……眞正之批評既無勝義，亦無劣義，其作用在屛除私見及偏見，而發爲公正之判定而已。”
> 高氏又曰：“自歷史的方面言之，亞里多德殆爲文學批評之始祖。其他批評之著作，

62） 注 30・35 所揭書「三　文學與文學批評」11（15）頁。
63） 朱著（注 58 所揭の開明書店版）「第一　緒言」2 頁（注 60 で擧げた校補本でも同じ）。

視亞氏時代儘有更遠者，然自亞里多德之 *Poetics* 及 *Rhetoric* 出而後文學批評始入確定之境界。其時文學在一方面極爲繁富，在又一方面則又極爲缺乏。盛世保列（Saintsbury）論之，謂亞里多德之論詩，則以其時小說尙未成立，不無遺憾。其論散文，則又以雄辯術獨擅一時，不無偏重。此言誠有見也。蓋古代之批評大抵如斯矣。[64)]”

「批評‘criticism’という言葉は古代ギリシア語で「裁判」を指す語に由來し，故にそれは文學・美術における對象の性格や價値を判定する藝術である。事物の性格を明らかにする，これが批評の持つ第一の意義となる。アーノルドは「批評とは，公平無私な行爲で，世に存する最良の思想・知識を學び，また敎えることだ」と述べた。そこから第二の意義，文學や美術の創作が有する特徵や性格の分析・明確化が生じ，批評自體が獨立した文學となった。批評は粗探しだと，そう言う者は多いが，これには何の根據も無い。……眞の批評においては非の打ち所が無いもの，批判にも値しないものは存在しない。批評は私見・偏見を除き，公正に判斷することを本旨とする」。およそこう譯せる一段の後に，朱東潤は引用を續ける。

「歷史に卽していえば，アリストテレスは文學批評の開祖である。彼以前にも批評家はいたにせよ，アリストテレスの『政治學』と『辯論術』が現れてから文學批評は初めて確かな領域を占めた。當時，文學はある方面は甚だ盛んだったが，別の方面は甚だ空虛であった。セインツベリーはこれについて，アリストテレスは詩を論じたが，その時期は小說がまだ形を成しておらず，（彼の文學論にも）缺落が無くもなかった。彼は散文を論じたが，（當時は）辯論術が一世を風靡しており，（だから彼の文學論には）偏りが無くもなかった，と述べる。この言葉には見識がある。そもそも古代の批評とは槪ねこういった（過不足のある）ものだ」。

『中國文學批評史講義』の初稿（1932 年）ではかく引用されたゴスの言葉は，第二稿以降では前揭の箇所（注 63 に出所を擧げた）を除いて削除される。推測に涉るが，その原因は朱著の形式にもあるだろう。羅著とても大學での講義が執筆の契機だが，朱著は講義錄としての性格を色濃く持ち續けた。「大綱」と題する點に象徵されるが，章節（一章節の內容が一回の講義に相當したのではないか）の分量は制約されたと思しい。從って，「緖言」で同一人の言說を繰り返すことが憚られた可能性は想像されてよい。さて，ゴスの數ある著書に當該の記述は見られないが，羅根澤や朱東潤はどこからこれらを引用したものか。

64） 注 60 所揭書「附錄二　歷次講義刪存及《大綱》再版後記・一，1932 年本講義節存・第一緖言」442–443 頁及び卷頭書影。本文での引用に見える「……」は，原文のとおり。

國外の言説を示すに際して，小論で見てきた「中國文學批評史」の著者による出典の記述は，必ずしも充分ではなかった。意圖的なのか，前近代における著述の形態に倣ったものか，羅著と朱著もゴスが述べた言葉の出所を示さない。ただ幸いにして，武漢大學で印刷された『中國文學批評史講義』初稿の朱東潤舊藏本に著者自身の識語が見られる。それには，ゴスの説について「見《英文百科全書》[65]」とあるという。卽ちブリタニカ百科事典（第 11 版）の‘criticism’に關する解説で，その執筆を擔當したのがゴスだったのである[66]。ゴスの擧げた參考文獻から，彼が引くアーノルド[67]やセインツベリー[68]の言葉も，典據が知られる。

朱東潤や羅根澤が百科事典の記事に基づいて論述を進めた點は，かくて明らかになった。事典の解説に賴ることの適否は措いて，彼らがそれに據る度合いは小さくない。兩者は共に自著の「緒言」で，ゴスによる批評を扱う記述を援用する。羅氏が「文學裁判」という表現を度々用いることは，前節より既に見てきた（注 35・37・38・43・62）。これが‘criticism’の原義は裁判だというブリタニカ百科事典の説に依ることは，想像に難くない。

また朱東潤の方も古い基準では革新的な作品を批評できない事態（羅根澤もこれに言及），批評の役割や分野による過不足に關して，ゴスの記述を引く。彼が著した「中國文學批評史」の定稿となる朱著においては，基準に關わる一條を除いて，それらの引用は姿を消す。だが批評の在り方など彼が論じようとする領域の本質的な事柄について，ゴスによる批評史の把握，またそこに見えるセインツベリーの言説から朱氏が知識を得た事實は動かせない。羅根澤が自著で西洋の文學論に度々觸れたことは前節で見たとおりだが，朱氏の事例も參照するならば，これはこの時期における當該領域の研究に共通の傾向といえるのではないか。

お わ り に

陳著で「參考書」として擧げられた英語文獻のうち，ウィンチェスター（キンチエス

65） 出所は前注に同じ（443 頁注①）。

66） Gosse, Edmund. ‘Criticism.’ The Encyclopædia Britannica : A Dictionary of Arts, Sciences, Literature and General Information. 11th ed. 29 vols. Cambridge : Cambridge University Press, 1910, Vol. 7. 468–470. 記事の末尾に執筆者を示す‘E. G.’の頭文字が見えるが，同書卷頭の略號一覽でそれは Edmund Gosse を指すと分かる。

67） Arnold, Matthew. ‘The Functions of Criticism at the Present Time.’ *Essays in Criticism*. 2 series. London : Macmillan and Company, 1865. First Series. 37.

68） Saintsbury, George. *A History of Criticism and Literary Taste in Europe*. 3 vols. Edinburgh and London : William Blackwood and Sons, 1900, Vol. I. 191–193.

ター）の著作（注 20）には早い時期（1915 年）の邦譯が存在する。その「序」の全文を，次に掲げる。なお文中のヒルン Yrjö Hirn（1870-1952）はフィンランドの美學者，ベルグソン Henri-Louis Bergson（1859-1941）はフランスの哲學者である。

作物を愛讀する人に，文藝とはどんなものか，君の讀破した範圍內で好いから，一括りにした所を敎へて吳れと賴んで見ると，大抵のものは行き詰る。丁度始終人間と交際して生きてゐながら，人間とは何ぞやといふ質問に應ずる事の出來ないのと一般である。

私が昔しさういふ疑問を自分で起して自分で苦しんだ時，英國で出來た書物をあれかこれかと搜して，解決の手掛りにしやうと思つた所，案外參考になるものは少なかつた。英國人の頭腦が一般に實際的であつて綜合と抽象に興味を有してゐないためか，或は特別に文藝方面の研究丈が閑却されてゐたためか，其邊は斷言しにくいが，何しろ斯ういふ種類の著作が英國に乏しかつたことは事實である。

私は日本へ歸つて來てから，英吉利人よりも亞米利加人の方が，却つて自分達と同じ方向に動いてゐるのではないかといふ氣がし出した。それは私の參考にしやうと思ふ書物がぽつぽつ亞米利加人の手によつて發表され始めたからである。然し亞米利加は矢張り亞米利加だとでも云はうか，標題は頗る立派な癖に，取り寄せて見ると，實に中味のない詰らない著述も其中には隨分あつた。

キンチエスターの文藝批評論も實はその時分眼を通したのである。それは今から殆んど十年も前で，丁度出版當時の事と記憶するが，大學の圖書館に入つて，貪るやうな勢で，頁から頁，章から章へと眼を移して行つた私は，大變な愉快を感じた。私はそれが大學の書物である事を忘れて無暗にペンで棒を引いた。あとで自分が新らしいのを買つて，さうして取り換へれば構はないといふ氣も交つてゐた。

私は今其書物の內容を明瞭に覺えてゐない。けれども相當の見識をもつて要領を得た理論が書いてある事丈は慥かだと云つても差支なからふと思ふ。ことに文藝とは何ぞやといふ疑問に解決を與へる著述の少ない英米に於ては，正に有益で必要な刊行物の一つに數へらるべきものであらふと思ふ。

其後三四年してから私は早稻田大學で此書物を參考書として學生に使はせてゐるといふ話を聞いて，內容の秩序ある點から見ても，論旨の高遠に失せざる程度から見ても，普通の講義抔よりも却つて恰好だらふと考へた。

嚴密な意味で十年後の今の私が此書を評したら，僭上の沙汰ながら，或は批判の餘地があるかも知れない。然し十三四年前に讀んだヒルンの「藝術の起源」が去年頃漸く日本に譯されて，しかも有益に行はれてゐる所から見ると，此書を十年後に

日本化するのも，決して無駄な仕事でない事は慥かである。ベルグソンの「時と自由意志」などは發表後二十年に至つて始めて英譯された位なものであるから，讀者に其心得さへあれば，譯者の意志に背かないやうに，旨く此書から得た知識を活用出來るのは無論である。

大正四年九月

夏目漱石[69]

漱石こと夏目金之助（1867-1916）が英國への留學から「日本へ歸つて來」たのは，明治三六年（1903）一月のことである。「文藝とはどんなものか」と彼が模索した對象が西洋流の定義に基づく「文藝」（文學）だったことは，歐米に倣う近代國家を形成しつつあった時期を思えば，容易に想像できる。彼が圖書館の藏書に書き込み[70]，自身の著述でも引證する[71]ほど傾倒した書物が，ウィンチェスターの著作であった。少し遲れて全面的な「近代化」が始まった中國でも，やがて同じ事態が起こる。卽ち，西洋人の考える「文學」とは何か，という問いへの答えが希求されるようになったのである。「近代化」が「西洋化」とほぼ同義だった時期，それを知らずに「文學」は語れないという認識が廣まる。かくして，このような疑問に答えてくれよう論著が西洋から直閒接的にもたらされる[72]。

西洋流の尺度を用いる對象は，當時の中國で生み出されていた「文學」だけには止まらなかった。中國の古典を總括する際に，過去の「文學」，そして「文學批評」にもそれは適用されていく。實際に歐米の文獻をどれほど咀嚼していたかは疑問だが，第 1 節で

69）植松安譯『キンチエスター氏文藝批評論』（大成堂，1915 年）「序」。夏目金之助『定本漱石全集　第 16 巻　評論ほか』（岩波書店，2019 年）634-636 頁に據るなどして誤字等を改めた箇所がある。

70）本文に引いた漱石の文章には「大學の書物」とあるが，實は第一高等學校の藏書だったらしい。東京大學駒場圖書館に所藏されるウィンチェスターの著書（注 20）には，漱石の文字（1903 年夏に書き込まれたと推測される）が大量に見られるという。岡三郎「東京大學教養學部圖書館に發見された漱石の書き入れ本 ――『文學論ノート』研究（三）――」，『青山學院大學文學部紀要』第 22 號（1981 年）14-25 頁（『夏目漱石研究　第 1 巻　意識と材源』國文社，1981 年，368-386 頁）參照。

71）夏目金之助『文學論』（大倉書店，1907 年）15，285 頁にウィンチェスターの著作（注 20）への言及が見られる。『定本漱石全集　第 14 巻　文學論』（岩波書店，2017 年）37，244 頁參照。

72）例えば，ウィンチェスターの著書（注 20）には C. T. Winchester（溫徹斯特）著，景昌極・錢堃新譯，梅光迪校『文學評論之原理』（商務印書館，漢譯世界名著，1923 年）という譯書がある。また日本人の著作を通じた，このような「文學概論」ともいうべき著作の中國での普及については注 25 所揭『近代中國文學史觀的發生與日本影響』第三章・第五節參照。

見た如く，陳鐘凡は如何にも西洋の文學論を意識しているかのような姿勢を陳著の中に示していた[73]。

羅著や朱著に至って，このような傾向はさらに強くなる。漱石が「論旨の高遠に失せざる」とウィンチェスターの著作を評した點を思い返されたい。羅根澤，朱東潤は共に，百科事典の同じ記述を用いて（注 62・63），「批評」の性格を說いた。簡素な記述の利用という手段を期せずして共有した背景には，「批評」とは何かを「高遠に失せ」ず論じる時代の要請があった。確かに西洋の文學論を「中國文學批評史」に援用することには，同時代人も疑問の聲を上げていた[74]。また，「十年後の今の私が此書を評したら」「批判の餘地があるかも知れない」と漱石が述べる早々に古びてしまいかねない理論への依據，さらに小論で見た間接的，斷片的な移入が果たして，「中國文學批評史」の研究に有效かには再考の餘地もあろう。

ただ小論で扱った時代が古典文學の批評という新たな研究分野の草創期だった點を，我々は忘れてはなるまい。しかも中華民國期，まして日中戰爭の最中に羅著や朱著は著されており，國外の資料を充分に利用できたとも思えない。さらに中國學の徒であるその著者に西洋の理論にまで習熟せよと望むことは，過大な要求といえよう。むしろ英譯された文獻，歐米の思想により親しんでいる中國人研究者の論文，果ては事典（當時は相應の權威が認められていたであろう）など原著ならぬ資料を通してでも，新しい理論を導入しようとした羅根澤らの姿勢にこそ目を留めるべきだろう。

羅著を例に取れば，19 世紀末期に沒して既に令名の高いアーノルド，沒後なお間もないアナトール・フランス，セインツベリーやゴスら，書中に名の見える西洋の知識人は多岐に涉る。他者の文章からの引用（注 43・44）に現れるとはいえ，エリオットやクローチェといった活動中の理論家も，そこに含まれる。1940 年代の時點で羅根澤が同時期の文學論にも目配りしようと努めた點は，認めてよいと思われる。「中國文學批評史」という領域が勃興する際，從來の研究が多く考えた如く，歐米の理論は原典を通して導入されたわけではない。だが，それらが研究の根幹 ——「批評」の定義など—— に與えた示唆は小さくなかった。

73） 通史及びその他の早い時期における「中國文學批評史」を扱う論著に見られる，中國と西洋の文學觀を比較して見せる姿勢は，劉紹瑾「中國文學批評史學科建構中的中西比較意識」（『廈門大學學報（哲學社會科學版）』2005 年第 4 期，2005 年）參照。

74） 朱自清「詩文評的發展」は羅著の前 3 册（注 30），朱著の開明書店版（注 58）への概ね肯定的な書評だが，第 2 節で見た中國・西洋の文學を比較する羅著の記述には疑義を呈する。『文藝復興』第 1 卷第 6 期（1946 年）760-762 頁，朱喬森編『朱自清全集　第 3 卷　散文編』（江蘇教育出版社，1988 年）「語文零拾」26-29 頁。注 33 所揭論文 145-146 頁參照。

1940 年代前半までの「中國文學批評史」が國外の理論を取り込んだ明證は，小論に擧げた事例に限られる。これらの理論が批評の研究に及ぼした影響の解明は，同じ著作の全體を讀み込む作業に俟つ。また羅著や朱著に續く通史や關連の論著が西洋の文學理論をどう援用したか，またしなかったかも今後の研究課題となろうが，その分析は他日を期したい。